

イベント名	「わたしたちの教育」± AI = X — 問うて、答えて、再び問う —		
実施委員会	研究集会委員会	開催場所	オンライン
開催日時	2024/08/25 13:30~16:00	参加人数	16名
参加資格	会員・非会員	参加費	無料
イベント概要(案内文など)			
<p>第12回研究集会開催にあたって、8月にプレ企画を行います。</p> <p>AIは、我々の生活に大変便利な存在であるとともに、社会全体に大きな影響を与え続けています。そして「AIと倫理」「AIと芸術」「AIと仕事」など、AIを取り巻く様々な議論も繰り広げられています。特に2022年11月にChatGPTが公開されて以来、人間のように各種コンテンツを作り出す技術、つまり生成型AIに対して世界中で大きな反響が起こり、急速に我々の生活の中に浸透してきました。このような現状の中、学習者による生成型AIの活用について、教育機関の対応は様々です。また、我々教育関係者による生成型AIの活用に関しても、利用の可能性が検討されています。では、ことば・文化・教育・社会にかかわる「わたしたちの教育」は、AIをどう利用し、向き合っていくのでしょうか。</p> <p>プレ企画では現在、AIを積極的に取り入れている方も、まだAIに対してどう取り組んでいいか迷っている方も、「わたしたちの教育」± AIの現状から、「わたしたちの教育」そのものへの問い直しと、AIとの関わりから見えてくる「問い」を議論していきます。</p> <p>当日は、茨城大学の笹井一人さんに、AI開発および、教育とAIの現状と動向について話題提供をしていただきます。話題提供を受け、参加者のみなさんが現在抱えている問題点などを共有し、教育とAIに関する「わたしたち」の「問い」を立てたいと思います。そしてその「問い」を本企画につなげ、学習者の面と教育者の両面からの可能性を追求し、将来の言語文化教育の研究に与える影響を議論する場を12月に企画します。ぜひ、みなさんのご参加をお待ちしております。</p>			
活動報告			
<p>【全体について】</p> <p>近年、AIを取り巻く様々な議論が繰り広げられている。チラシの文面「現在、AIを積極的に取り入れている方も、まだAIに対してどう取り組んでいいか迷っている方も、「わたしたちの教育」± AIの現状から、「わたしたちの教育」そのものへの問い直しと、AIとの関わりから見えてくる「問い」を議論していきます。」という趣旨に沿って、教育にAIをどう活用するかという視点だけではなく、教育からAIを取ると何が残るのか?という点についても考える場となった。本プレ企画の流れは以下の通りである。はじめに主旨説明があったのち、「—問うて、答えて、再び問う—」の流れで進行された。</p> <p>1) 茨城大学の笹井一人さんに、AI開発および、教育とAIの現状と動向の内容を主に、話題提供をしていただく</p>			

- 2) ブレイクアウトルームに分かれて、話題提供で感じたことや各自が考えている課題や疑問 AI と教育に対する疑問(問い)を出し合い、その問いについて考える
- 3) メインルームに戻り、グループごとにディスカッションで生まれた問いや意見を共有する。各グループの問いや意見に対して、笹井先生からもコメントをいただく
- 4) 再度ブレイクアウトルームに分かれて、他のグループで生まれた問いや意見、笹井先生のコメントから、さらなる気づきや疑問、論点が見えた問いについて話し合う

【話題提供1名】

工学野がご専門の笹井一人先生に、AIと人間の異なり、AIと教育の関わりについて話題提供をしていただいた。まず、AIと人間の異なりに関して、AIはこれまでに構築されたシステムに則って「枠組み」の中で「要求」された答えを生成してきて、今、その枠を広げられるか、AIの開発において挑戦がなされているようだ。一方、人間には「欲求」があり、人間はその「欲求」に従って行動する。また、人間の思考や行動のプロセスはあやふやで不安定なことから、無意識的にAIの持っている「枠組み」を超えた「外側(=枠組みの外にあるもの)」が入り込んでくる。そして、人間の思考や行動は個性を持っており、多様性がある。このような異なりがAIと人間には存在する。

次に、AIと教育についての問いをいただいた。例として、子どもの複数の教科の得意不得意を五角形で示した場合、AIは「枠組み」の中で答えを導き、五角形の全ての角が均一になることを目指す教育へと導くという。一方、人間には得意不得意、多様性、学びたいという「欲求」があり、バランスよく五角形の角を均一にすることだけが正解ではなく、得意をさらに伸ばすことも一つの教育の在り方である。この事例をもとに、教育現場でのお話をいただいた。このお話から、どのように教育者は捉え、働きかけるといいのか。人間にしかできない教育とは何なのか、私たち人間は教育とどのように向き合っていくのか、「わたしたちの教育」とAI(とその特性)はどのように関わっていくのか、グループでの話し合いのテーマになる問いが投げかけられた。

【話題提供を受けて、あるいは参加者の経験の共有から出た意見・疑問点】

・「欲求」の部分は、データに含まれないから、「欲求」とか「欲望」を伸ばしていけば、いいのではないかと?今までの教育というのは、的確に、効率的に答えるということをめざされていたけれど...

・学びは、「自分出発」になっていくのではないかと?そういう芽を摘まないように育てていく必要があるのでは?その「欲」すらなくなっていく可能性もある。AIで何でもできるようになってきたら、仕事もなくなっていく、「自分らしさ」を追求したいという人も出てこなくなってしまうのではないかと?「やりたい」という欲求についてもバーチャルで体験できるとか、簡単に満足できてしまうということもある。純粋に「やりたい」と思う気持ちが薄れてきてしまっている気がする。経験と結びついて焼きついていることなども今後、経験できなくなってしまうのではないかと。

・教育の在り方は、「欲求」を伸ばしていく必要がある。AIによって伸びる人はいると思うが、頼ることによって、「欲」がなくなっていくという可能性もある(実際、何やりたいか分からないという若者が増えている)。話題提供の話の中で、「師弟」の話が面白かった。自分が学ぼうという気持ちが学びにつながっている。学びたいと思っていたから、吸収した。(例:「先生があの時~とおし

やった」=「欲」があった。)親に言われているから勉強している学生は、「欲求」を持っていない学生である。教師が、興味を持たせるように働きかけていくと、興味を持って学ぶ学生が少しだけ出てくる。

・AIのこわい点:AIが出した答えが総意だと思ってしまう。人間の脳ってどうなってしまうのか?人間の脳は使わなくなると、狭い思考しかできなくなってしまう。AIを使うことが当たり前となってしまうと、「考えない」世代が、大学に入ってくることになるのではないかと疑問がある。

・教師の役割としては、教師が興味を持たせるように働きかけていく、学びを位置付けるためのきっかけである。「何を教えるか」、から、学習者目線で、「何を学びたいか」「どう生きたいか」を考えるように視点を移す必要があるのではないか。最後に残る「欲求」は、「成長欲」「人とのコミュニケーション」ではないか。

・人間同士の創発現象を使った教室活動が、今後の教師の挑戦なのか。教師の在り方・役割は、ファシリテーター、創発的な場を提供するような教師に変わってきている。先生と学生集団の創発の場であったが、現在は学生同士での創発の場を提供する教師の役割に変わってきている。

・AIではなく人間の特徴として出てきた「創造性」に関して、教育現場においては、授業で扱う内容や評価の仕方には教師の教育観が反映されている。そして、教師の教育観に関して、「教師の教育観に無自覚な場合もある」「教師教育の研修などで教育観について話す場面を意識的に作っていることもある」「教科書通りにやっていたら授業ができるという現状になりつつある」「教員のアウトプットには教育観が反映されるけど、無自覚に授業を進めている場合もある」「カリキュラムがあり、枠の中でそこそこできる環境になっていることもあり、教育観を言語化する必要がない環境になっている場合もある」などの意見を共有した。

・教育の公共性を考えると、規定の部分で学ぶこと(知識の獲得)+創造が必要だと思う。規定の部分(例えば、一般知識や文法的な知識など)を学ばないとクリエイティビティーは獲得できないのか?という問いが生まれた。

・本当に創造していかないといけない部分は何か?教育現場のスタンダードと創造性の役割分担をどうするか?どこまで人間でどこまでAIがするのか?社会科教育では、既存の社会の価値観を見直す取り組み(例えば、校則の必要性を見直す活動)がおこなわれている。また、「社会化」「対抗社会化(counter socialization)」という視点で、多様性の認識、社会との関わりについて考える活動もおこなわれている。一方で、常識を共有していない状況にあるという視点では、規定の知識をよりしっかり扱うべきだという意見もある。創造性を高めるのか、規定の知識・基礎的な知識を丁寧にすくいあげて扱うのか、教師にも多様な考え方があり、その教育観によってどのように授業を展開していくのか、どこに時間を割くのかかわかっている。

・AIを避けるのではなく、AIを引き受けざるを得ない社会になっていると感じる。AIを排除することになれば、社会と学校を乖離してしまうことになる。AIを活用するとして、どのように活用するのかということを考えていく必要があるのでは。

・言語教育において、レポート課題に対して実際に AI (ChatGPT) にも指定のテーマで書かせたところ「AI に書かせてもある程度きれいな文書は書けるが、個別性を含むエピソード、オリジナリティーの部分は書けない」という経験をした。「無理やりさせられる課題に対して、本当にやったほうがいいかどうかの教師の信念ははっきりしているかどうか」という教師の教育観にも関連している。

・ChatGPT に英語の文法を教えてもらい、点数をつけているが、人が採点した時と ChatGPT が点数をつけたときに、ChatGPT の方が高い点数をつける傾向にある。生身の教師と ChatGPT の点数のつけ方の違いについての疑問があげられた。人が重視するような語順、語彙選択は、AI (ChatGPT) が考慮せず、「英語が通じる」、「理解できるレベル」で採点していて、英語学習の経験の違いや、触れてきた文章の蓄積の量が異なっているからではないかと議論があった。話題提供者から、AI の点数のつけ方を参考程度にし、最終的に教師が確認する必要があるなどのコメントをいただいた。

・進学を目指す超初級レベルの留学生の日本語教育では、授業中のスマホなどの使用が禁止されているが、ChatGPT などで生成された文章をそのまま作文に使う場合がある。そこで、「実感のある言葉を使用」することが求められているのではないかと議論があった。AI が生成する言葉は、果たして実感のある言葉なのか。すでに若い学生は、AI と切り離せない関係になってきたと感じている。場面を切り分けて、対話を重視し、実感あるような言葉の選択をする。人間に欲がなくなっていく、尊敬できる師匠がいても、仲間たちと学びたい欲がなければ、AI で完結するような学習になってしまう。一緒に学びたい仲間は、自分に関心を示して、聞く耳を持ち、オリジナリティーに興味を示すような仲間ではないか。最大限の言葉・所作などで、認め合う関係性であるではないか。

・障がいのある子どもたちのへの教育に AI をそのまま使うのは難しいと感じる。また、方言研究に関しては、AI が文法の異なりや意味、音声、イントネーション「くえ」「けえ」など、方言は AI では処理できない状況がある。文末表現だけ方言を使っている掲示物などもあるが、文末だけ方言だと違和感がある。さらに、方言、コールセンターの自動対応、お年寄りの話し相手など、AI で福祉をサポートできるようになると負担も減りそうだが、流暢なやりとりやクレームに対応するには現段階では難しい。AI の実装が難しい場面もまだまだある。

【本イベントの全体の振り返り】

本イベントでは、AI 推奨、AI 受け入れ、AI に危機感を覚えるなど、「わたしたちの教育」に AI が+になりえたり、-になりえたりする場面を考え、AI と多様な向き合い方があることを、参加者の関わっている教育の実例を共有しながら議論できた。グループディスカッションでは多様な意見が出たが、全てのグループの共通の議題として出てきたのは、教育の在り方、教師の在り方が AI の開発が進むとともに変化してきたという意見である。一人ひとりの教育観について、どのような教師になりたいか、どのような教育が必要か、教育や教育観を見つめ直す機会になった。

【クロージング】

本プレ企画のグループディスカッションで出た議論は Padlet で共有しているが、出てきた全ての問いについて答えが出たわけではなく、「問うて、答えて、再び問う」の過程の中で、新たな問いも多く生まれました。この疑問や感想を、12月の本企画で再び持ち寄り、再び問い、それを深めることができたら嬉しいです。もし興味を持っていただけましたら、京都で実施予定(対面)の本企画にもぜひご参加ください。